

宇宙時代の英雄像 ——1960年代アメリカのエートスと未来——

青砥 吉隆

I. 序

1. 『ライフ』と宇宙飛行士

1959年、アメリカに新時代の英雄が誕生した。宇宙飛行士である。当時最盛期にあった一般誌『ライフ (Life)』は、各々の宇宙飛行士に年間1万6,000ドルの契約料を支払うという条件の下、彼らと独占取材契約を結んだ。これは破格の好待遇だった⁽¹⁾。

アメリカの宇宙飛行士たちは、頻繁に『ライフ』の表紙を飾った。その取材範囲は彼ら自身のみならず、妻や子供、両親、友人にまで及んだ。例えば、初の有人宇宙飛行を控えた1961年には、宇宙飛行士の候補が三人にまで絞られていた。ジョン・グレン (John Glenn)、ヴァージル (ガス)・グリソム (Virgil "Gus" Grissom)、アラン・シェパード (Alan Shepard) である⁽²⁾。1961年3月3日号の『ライフ』は、彼ら三人の詳細な経歴だけでなく、趣味や、家族と過ごす様子なども紹介している。さらに、彼ら全員を「勇敢で愛国的⁽³⁾」だと結論付けており、宇宙へ実際に旅立つ前から、彼ら宇宙飛行士が英雄としての地位を獲得していたことが分かる。

しかし、『ライフ』をはじめとするメディアによって示された宇宙飛行士たちの「英雄的」な姿を、無批判に事実として受け入れることはできない。なぜなら、そこにはある種の情報統制が敷かれていたからである。『ライフ』で記者を務めていたドーラ・ジェーン・ハンブリン⁽⁴⁾ (Dora Jane Hamblin) は、1977年1月にアイオワ州立大学のペリー・マイケル・ホワイ (Perry Michael Whye) にあてた手紙に、以下のように記しているという。

『ライフ』は、宇宙飛行士とその家族を、腫れ物にでも触るように扱っていたと思う。他の報道機関にしても大半がそうだった。彼らは英雄だったのだ...もちろん、中には結婚生活が上手くいっていない者もいれば、女遊びをしている者、酒に溺れる者もいたことは知っていたが、絶対にそれを記事にすることはなかった。彼らがそうさせなかったらろうし、NASAも許さなかったらろう⁽⁵⁾。

そのことを裏付けるように、アポロ11号で月着陸船パイロットを務めたエドウィン（バズ）・オールドリン（Edwin “Buzz” Aldrin）と、アポロ16号で月着陸船パイロットを務めたチャールズ（チャーリー）・デューク（Charles “Charlie” Duke）は、イギリスのジャーナリスト、アンドリュー・スミス（Andrew Smith）によるインタビューの中で、オールドリンは地球帰還後に抑鬱症状を訴えたことを、デュークは不倫と子供に対する高圧的な態度を繰り返していたことを、また両者共にアルコール依存症だったことを認めている⁽⁶⁾。しかし、1960年代当時にこの種の情報が公になることはほとんどなかった。

ただし本稿の目的は、国民的英雄だった宇宙飛行士たちの不祥事の数々をあげつらうことにはない。むしろここでは、『ライフ』などの当時のアメリカのメディアが、宇宙飛行士たちに不都合なことを書くことは絶対になかった、という点に着目したい。元NASA職員で、アポロ計画についての詳細な記述、『人類、月に立つ（A Man on the Moon）』を著したアンドリュー・チェイキン（Andrew Chaikin）も指摘するように、宇宙飛行士たちの軽率な行動がメディアで取りざたされなかったということから、1960年代のアメリカにおいては宇宙飛行士たちが特別な位置にあった⁽⁷⁾、ということをやがいがい知ることができるのである。

では、具体的に、彼ら宇宙飛行士たちは『ライフ』にどのような英雄として描かれたのだろうか。『ライフ』が作り上げた宇宙飛行士たちの英雄としてのイメージがあまりに強烈だったためか、これまでの宇宙飛行士に関する研究は、そもそもこの問いを問おうとしてこなかった。だが、政治的な色彩を極めて強く帯

びていた米ソの宇宙開発競争を歴史研究の中で相対化する上では、宇宙飛行士がどのような政治的、あるいは社会的役割を担う存在として描かれたのかということ客観的に分析する必要がある。

2. 四つの特徴

以降論じるように、宇宙飛行士たちは1950年代後半から1960年代にかけてのメディアによって「アメリカ的な美德と魅力を備えた模範的かつ英雄的な、未来を担うアメリカ人」として描かれた。彼らは、合衆国を代表して宇宙でソヴィエトと競い合う集団に相応しい存在たることが求められ、『ライフ』をはじめとするメディアも、彼らをアメリカの英雄として伝えざるを得なかったのである。裏を返せば、宇宙飛行士たちと独占取材契約を結んでいた当時の『ライフ』を精査することで、冷戦期という特殊な状況下における模範的かつ英雄的なアメリカ人の姿とは具体的にどのようなものだったのか、という問いを明らかにすることができるということになる。

そこで本稿は、『ライフ』が宇宙飛行士たちと独占取材契約を結んでいた1959年9月14日号から1970年5月11日号までの間に発行された物の中から特徴的な号を選び出し、紙幅の都合上、計7冊を主な分析対象とした。導き出された結論は以下の通りである。

宇宙飛行士たちは、大まかに分けて四つの特徴を備えたアメリカの英雄だった。第一の特徴は、彼らが妻や子供を愛する家庭的な男として描かれたという点である。第二の特徴は、彼らが勇敢で愛国的な男として描かれたという点であり、第三の特徴は、宇宙飛行士が熱心なクリスチャンであった場合、宇宙飛行士と家族はそのことを前面に押し出し、『ライフ』もそれを強調したという点である。これら三点は、1950年代後半から1960年代にかけてのアメリカ社会のエートスを顕著に反映したものであり、宇宙飛行士がアメリカの英雄として成立するための必要条件だった。そして第四の特徴は、宇宙飛行士たちがアメリカの未来を担う英雄として描かれたという点である。これは1960年代のアメリカにおい

て、宇宙飛行士たちがアメリカの未来、即ち宇宙を体現する存在だったことに起因している。そしてこれら四つの特徴は、すべて当時のアメリカ社会と文化の影響を強く受けている。

II. 分析

1. 1959年9月14日号

『ライフ』と宇宙飛行士の独占取材契約はこの号から開始された。そこには、それぞれの宇宙飛行士たちの手記が掲載され、彼らが宇宙飛行士として訓練を受ける様子が写真に収められている。彼らはそれぞれが秘める強烈な個性を垣間見せつつも、世界初の宇宙飛行士となることに対する熱意、また自らの宇宙飛行士としての適性と、合衆国へ奉仕することの意義を語っている。また、記事は宇宙飛行士たちの訓練の様子を示すことで、宇宙飛行が最先端の科学・技術を要することを強調した。

a. ライト・スタッフ

アメリカの宇宙飛行士の第一世代、オリジナル7 (Original Seven) は全員、軍のトップ・エリートたるテスト・パイロットから選出された。テスト・パイロットの任務とは、音速を優に超える速度で開発中のジェット戦闘機を操縦し、機体性能の限界を探るためのテスト飛行を繰り返すという極めて危険なものだった⁽⁸⁾。そして、オリジナル7の中にはアラン・シェパードやガス・グリソム、ドナルド (ディーク)・スレイトン (Donald “Deke” Slayton) らのように、第二次世界大戦や朝鮮戦争で実際の空中戦を経験した者もいた。

これらの経験を踏まえ、オリジナル7たちは自らの冷静さや集中力、適応力などを強調し、それらを宇宙飛行士としての適性だとした。その適性とは、ジャーナリストのトム・ウルフ (Tom Wolfe) が「ライト・スタッフ⁽⁹⁾ (正しい資質: right stuff)」と呼んだものである。前人未到の危険な宇宙空間へ最初に乗り出す人間が、ライト・スタッフを備えた者であるべきとされ、それらが選考基準と

なったことは当然だった。

さて、ウォルター（ウォリー）・シラー（Walter “Wally” Schirra）によれば、飛行機乗りはテスト・パイロットをその仕事の頂点としてみなしており、また、良いテスト・パイロットは他の誰よりも上手く飛ぶことを強く誇りにしているという。彼が最初にマーキュリー計画⁽¹⁰⁾（Project Mercury）についての概要を聞かされた際には、それがまるで映画スタントのように思われたが、今ではそれが確固たる足場に基づいた計画であり、実際に良いテスト・パイロットが必要とされているということに気づくに至った。そして彼は、かつてテスト・パイロットとして空対空サイドワインダー・ミサイルの開発をしていた際に不具合により自らが発射したミサイルに撃墜されそうになったことがあったことと、朝鮮半島の空中戦について披露し、彼らが従事するマーキュリー計画においてもそれらの命懸けの経験が役立っていることを語っている⁽¹¹⁾。

ガス・グリソムやアラン・シェパード、ディーク・スレイトンも同様に、ジェット戦闘機パイロットに求められる集中力、精確さ、冷静さ、機敏さと臨機応変さがマーキュリー計画には求められると考えていることを明かしており、彼らも実戦やテスト飛行において命を失いかけた経験があると述べる⁽¹²⁾。

実戦やテスト飛行で遭遇した危機的な状況は一般の読者にとっても容易く想像できるものであり、それ故、宇宙飛行士たちもそのような体験を好んで語ったということは想像に難くない。

b. 世界初の宇宙飛行士

ゴードン・クーパー（Gordon Cooper）は、世界初となる有人宇宙飛行について以下のように述べている。この飛行は、陸軍のレッドストーン・ロケット（Redstone）に搭乗して高度160キロメートルまで打ち上げられ、数分間の無重力状態を経て大西洋へパラシュートで帰還する弾道飛行となる。この飛行で直面する人体へのストレスは、地球周回飛行ほどのものではない。なぜなら、弾道飛行では最高でも時速9,600キロメートルほどにしかならず、再突入の際に発生す

る熱もそれほど強烈ではないからだ。しかしそれでも、クーパーは、最初に打ち上げられる人物になることを望んでいる⁽¹³⁾。

また、シラーは次のように述べる。彼が興味を持っているのは、より高く上り、そして無事に戻ってくることだけだという。しかし、彼も世界初の宇宙飛行士となることを望んでいるという⁽¹⁴⁾。同様に、スコット・カーペンター (Scott Carpenter) も、この計画こそ彼が人生をかけるべきものだと考えているという⁽¹⁵⁾。

記事が書かれた1959年においては、有人宇宙飛行を成し遂げた国は無かった。そのため、1957年10月にスプートニク1号の打ち上げによってソヴィエトの後塵を拝していたアメリカにとって、世界初の有人宇宙飛行はその遅れを取り戻すまたとない機会だった。宇宙飛行士たちはそのことを十分に認識した上で、上記の発言をするに至ったと考えられる。

c. 国家への奉仕

グリソムは、このような危険な仕事に就いていると、なぜわざわざ自らの生命を危険にさらそうとするのだらうと疑問に思うことがあるという。グリソムによれば、彼がアメリカ空軍将校であり、さらにその中でも特に愛国的であるからというのが理由である。そして彼は、もし他の誰よりもこの計画に適した人材だと国が考えるのであれば喜んで参加しようと思う、と続けている⁽¹⁶⁾。

シェパードは以下のように述べている。彼が海軍の仕事を中断してこの計画に参加している理由は、それが合衆国への奉仕になるからであり、また個人的な挑戦でもあるからだという。彼はこの計画が成功すると信じており、成功することがこの計画にとって重要なことであると考えている。そして同時に、それを成し遂げることを望んでいる⁽¹⁷⁾。

また、カーペンターが明かしている通り、彼らの宇宙飛行士としての任務はボランティアだった⁽¹⁸⁾。これは、単に自発的に参加するという意味だけではない。事実、宇宙飛行士としての任務は無給であり、彼らには軍の階級に応じた給与が

支給されていた。アポロ計画で月へ飛んだ宇宙飛行士が受け取った一日あたりの報酬は、出張に出かけた場合に受け取る額と全く同じであり、そこから様々な控除が行われたという⁽¹⁹⁾。

先に触れたように、彼らの多くが、朝鮮戦争などで東側陣営の戦闘機と実際に空中戦を繰り広げ、戦果を上げたことを強調していた。これは、彼らが自らの命を顧みずに自発的に国へ奉仕していたことを意味した。このような彼らの姿は、冷戦という特殊な状況下における社会通念上賞賛されるべきものであり、英雄たる宇宙飛行士に相応しいあり方だったといえる。

d. 科学・技術

今号には、宇宙飛行士たちによる手記だけではなく、彼らが訓練を受けている様子や、マーキュリー計画で用いられる最先端の科学・技術についての記事も掲載されている。宇宙飛行士たちが乗り込むことになるマクドネル社製のマーキュリー・カプセルの設計テストについての記事は、このカプセルに豚を入れ、宇宙飛行士が体験する10倍の衝撃を与えてそのカプセルを地面に落下させたが、豚は無事だったと伝えている。また、カプセルの小型模型を華氏1,200度にまで熱する実験を行う様子が収められているが、それによると外部の表面温度とは対照的に、カプセル内部は華氏120度までしか上がらないという⁽²⁰⁾。

さらに、カプセルを操縦するための操縦桿の開発に宇宙飛行士が携わる様子や、彼らが生理学の授業を受けている様子が撮影されている。この授業では、宇宙飛行によって起こる身体の反応を的確に指摘できるように、血管の位置などを学ぶという⁽²¹⁾。

このように、今号においては宇宙飛行士たちの手記だけではなく、マーキュリー計画で用いられる科学・技術に関する事柄が数多く掲載された。宇宙飛行士たちは、最先端の科学・技術を用いて宇宙を切り開く英雄として扱われたのである。そして、以降概観するように、この宇宙飛行士像はアメリカの宇宙開発計画が進展すればするほど強調されていくことになる。

また、最先端の科学・技術と一揃いとなった宇宙飛行士のイメージは、同時に彼らの勇敢さと愛国心を示すものでもあった。なぜなら、これら最先端の科学・技術はえてして未発達であり、それ故、必然的に危険を伴うものでもあったからである。事実、当時のアメリカのロケット技術は未熟であり、マーキュリー計画で用いられるレッドストーン・ロケットは、何度も打ち上げ失敗を繰り返していた。これには、当の宇宙飛行士たちも少なからず不安を抱いていたはずである。アポロ13号で船長を務めたジェイムズ（ジム）・ラヴェル（James “Jim” Lovell）は、当時のロケットで打ち上げられることは、まるで自分のキャリアをわざわざ縮めるようなものだったと、冗談めかして語っている⁽²²⁾。

このように、戦争体験やテスト飛行のみならず、非常に危険を伴う最先端の科学・技術を用いた宇宙開発計画に宇宙飛行士たちは携わっていた。そのことが、結果として、彼らをより一層勇敢で愛国的な存在に仕立て上げることになったのである。

2. 1959年9月21日号

この号は、宇宙飛行士本人ではなく彼らの妻たちについての特集を組み、彼女らの手記と写真を掲載している。図1と2に示したとおり、今号の表紙は、夫たちを特集した1959年9月14日号の表紙と対を成している。特集のタイトルは、「宇宙飛行士を支える7人の勇敢な妻たち、内なる思いと不安を語る⁽²³⁾」である。注目すべきは、7人の宇宙飛行士の妻たちが、夫が宇宙飛行士として打ち上げられることに対して不安や緊張を抱いていることを明かしたにもかかわらず、同時に、世界初の宇宙飛行士になることが夫の望みであるが故、妻たる彼女自身もそのことを望んでいると述べていることだ。さらに、彼女たちが国と夫を信頼しているということも強調された。そして、ジョン・グレンの妻であるアンナ・グレン（Anna Glenn）は、グレン家におけるキリスト教が果たす役割についても語っている。



図 1. *Life*, September 14th, 1959, cover page.

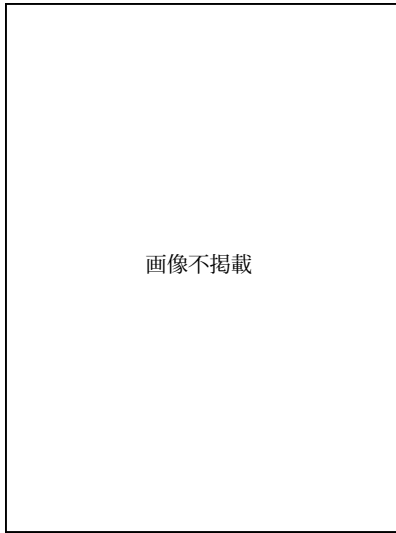


図 2. *Life*, September 21st, 1959, cover page.

a. 不安

スコット・カーペンターの妻、ルネ・カーペンター（Rene Carpenter）によれば、夫から宇宙飛行士としてマーキュリー計画に参加することを聞かされ、協力することを決心したが、これは、彼女が全く恐れを感じていないということを意味しているわけではないという。自分たち夫婦がお互いに希望についても恐怖についても正直に打ち明け合っていることが彼女の支えになっていると、彼女は続けている⁽²⁴⁾。

また、ベティ・グリソム（Betty Grissom）は、夫のガスが最初の宇宙飛行士になれたならば当然喜びを感じるだろうと語っている。なぜなら、それこそが彼女の夫が望むことだからだという。しかしその彼女も、打ち上げの際には不安を感じるかもしれないと語る⁽²⁵⁾。

上記の二人とは対照的な意見もある。ゴードン・クーパーの妻、トルーディ・クーパー（Trudy Cooper）は、打ち上げの際には緊張するだろうが恐怖を感じることは無いだろうという。むしろ、彼女は子供たちを連れ、打ち上げを見に行きたいと考えている⁽²⁶⁾。

また、ディーク・スレイトンの妻、マージョリー・スレイトン（Marjorie Slayton）は、打ち上げを心配したことは一度もないという。なぜなら、夫ディークは、非常に安定した技量を持つプロフェッショナルであり、夫が緊急事態に陥ったとしてもそれをうまく乗り切れるだろうことに疑いはないからだという⁽²⁷⁾。

しかし、クーパー夫人やスレイトン夫人の手記が本心を表したものであるかどうかは疑いの余地が残る。1959年当時、有人宇宙飛行を成し遂げた国は無く、宇宙は文字通り未知なる空間だった。また前述の通り、当時のアメリカのロケット技術は依然として未熟であり、打ち上げの度に爆発、炎上するといった段階だった。

そのような危険極まりないロケットに乗せられ、いかなる助けも望めない宇宙空間へたった一人で送り込まれる宇宙飛行士たちが無事に地球に帰還できる確率というのは、決して高いものではない。しかし、『ライフ』という非常に広く読

まれていた雑誌に全くの本心を包み隠さずに掲載することは、特に軍人の妻たる彼女たちにとって躊躇われることだったのではないか。つまり彼女たちは、この記事が社会と夫のイメージに与える影響を考慮した上で、上記の様な発言をするに至ったと考えることができる。彼女らの発言が当時の米国の社会通念の影響下にあったことを裏付けるかのように、彼女たちは自身のうちにある不安や心配だけでなく、国家と夫に寄せる信頼についても語っている。

b. 国家と夫への信頼

アンナ・グレンは次のように語る。夫ジョンは、彼女と二人の子供にマーキュリー計画について様々なことを教えている。結果として彼女は、安全に宇宙飛行士を帰還させる方法を獲得するまでNASAが宇宙飛行士を宇宙へ送り込むことはないだろうということが確信でき、安心するに至ったという。記事が書かれた数週間前の無人テストの際に、事故で脱出装置のみが射出されてしまった時にも、彼女はすでにこの計画について多く知らされていたために、恐怖を感じることは無かったという⁽²⁸⁾。

また、先に触れたように、トルーディ・クーバーもアメリカの工業力と科学・技術力に対して絶大な信頼を寄せているとし、マージョリー・スレイトンも夫の能力を信じているために、不安を感じたことはないという⁽²⁹⁾。

夫らが参加する計画の意義を語る者もいた。アラン・シェパードの妻、ルイス・シェパード (Louise Shepard) は、マーキュリー計画は、人間が自らに嵌めた枷を脱ぎ捨てることができることの証明だと述べている。それは、人間は音速の壁を破ることが出来ないとされていたが実際には間違いであったことや、西へ船を進めていっても地球の縁からは落ちることはないということをコロンブスが証明したようなものだという⁽³⁰⁾。

c. キリスト教

アンナ・グレンは、次のように述べている。グレン家の暮らしの中では、宗教

が非常に重要な役割を担っているという。夫ジョンが宇宙飛行士の選抜試験を受けに行った際に恐れを感じた彼女は、一人教会へ赴き、そこで牧師に相談を持ちかけた。そして人間が、特にジョンが、宇宙を探索してはいけない宗教的な理由などはないという結論を得て、安心することができたという⁽³¹⁾。

さらに彼女は続ける。かつてクリスマスの時期に、ジョンが子供たちにクリスマスの意味を教えようと思い立ち、ある行動を取ったという。それは、子供たちに15ドルを渡し、7人の子供を持つ極貧の一家をスーパーマーケットに連れて行かせ、そこで食料を買い与えさせることだった。その一家は大いに喜び、感謝の印として彼女の子供らに歌を歌った。子供たちはその日を忘れることはないだろうと、グレン夫人は綴っている⁽³²⁾。



図 3. *Life*, September 21st, 1959, 157.

『ライフ』が1962年2月2日号で特集を組んだように、彼女の夫ジョン・グレンは長老派の信徒であり、強い倫理観と宗教的信念を持っていた⁽³³⁾。しかし、家族を紹介する上で様々な選択肢がある中、これらのキリスト教信仰に関する出来事をグレン夫人が取り上げたことは注目に値する。彼女は、他の宇宙飛行士の夫人たち同様、宇宙飛行士かつ軍人の妻として『ライフ』に手記が掲載されるこ

との社会的な意味を十分に承知していたということに、疑いの余地は無い。つまり、彼女によるキリスト教を中心とした生活の記述は、反共産主義、反ソヴィエトであることが重要視された1950年代後半のアメリカ社会と文化の影響を、色濃く受けたものだったといえる。これは同時に、熱心なキリスト教徒であることが、英雄たる宇宙飛行士とその妻にとって相応しい姿だったことの証左でもある。

また同記事には、仲睦まじいグレン夫婦の様子、幸せそうにプールで戯れるシラーおよびスレイトン母子、夫が仕事に励む傍ら、部屋の片隅で静かに読み物をするターパー夫人などの写真が掲載されている。これらには、宇宙飛行士の妻たちが、健気に夫を支え、夫と国家を信頼し、堅実に子供を育てる良妻賢母であるという印象を読者に与える効果があったとみられる。

3. 1961年5月12日号

1961年5月5日、アラン・シェパードはアメリカ人として初めて地球の大気圏外に達し、名実共に「宇宙飛行士」となった。シェパードによる宇宙飛行とその勇姿は全米で大きく報じられた。1961年5月6日の『ニューヨーク・タイムズ』紙は、「アメリカ、115マイルの高さにまで人間を打ち上げ、宇宙へ送り込む。シェパード宇宙飛行士は、15分の飛行の間にカプセルを操縦し、無線で地上と交信⁽³⁴⁾」と、第一面でシェパードの飛行を取り上げ大きく賞賛している。また、1961年5月19日号の『ライフ』は、シェパードの帰還パレードや、彼がケネディ大統領（John F. Kennedy）から直々に表彰されたことなどについて報じた。これらの記事からは、いかにこの飛行がアメリカに大きな喜びをもたらしたかが分かる。

しかし、この成功は決して手放して喜べるものではなかった。なぜならアメリカは、この約一ヶ月前の1961年4月12日に、有人宇宙飛行においてもソヴィエトに先行を許していたからである。1961年4月12日付の『ニューヨーク・タイムズ』紙は、第一面の最上段、全幅を用いて「ソヴィエト、有人飛行に成功。地

球周回中にパイロットは『気分良好』と報告」と、三行にわたるヘッドラインを構成し、ソヴィエトのそれまでの宇宙での功績を写真付で特集した⁽³⁵⁾。翌日の同紙では、あるイギリスの科学者による「ソヴィエトの科学・技術はアメリカより約三年は先行している」とのコメントが掲載されている⁽³⁶⁾。

世界初の人工衛星スプートニク1号に続き、ユーリ・ガガーリン (Yuri Gagarin) による世界初の有人宇宙飛行によって、宇宙開発競争においてソヴィエトがアメリカを大きく引き離したことは、科学・技術大国を自認するアメリカに大きな衝撃をもたらした⁽³⁷⁾。先に取り上げた『ライフ』1959年9月14日号においても、オリジナル7の中の一人が、「宇宙空間へ打ち上げられる初のアメリカ人に、そして恐らくは初の人類となる⁽³⁸⁾」とあるように、当時のアメリカは世界初の宇宙飛行士を生み出すことに、ほとんど疑いを抱いていなかったように見える。

アメリカの科学・技術の優位性に対する信頼感が激しく揺らぎつつあるこのような状況下において、シェパードの飛行を特集した『ライフ』1961年5月12日号の記事は彼の飛行の意義を半ば強引な論調で伝えざるを得なかった。そのことを顕著に示すのが、ソヴィエトのガガーリンとアメリカのシェパードによる宇宙飛行の比較記事である。

a. アメリカの科学・技術の優位性

記事は次のように報じている。ソヴィエトの宇宙飛行士ガガーリンは自動操縦による機体に乗せられた受身の乗客だったのに対し、シェパードの飛行はより洗練された操作系によって自ら操縦、制御してなされたものだった。シェパードは165個のダイヤルやスイッチ、レバー、そしてボタンによって機体の方向や姿勢、速度などを操作し、無事に機体を飛行、着陸させた。しかし、ガガーリンの機体の操作盤には主に4つの機器が示されているに過ぎなかった。そして、図4と5に示した通り、記事はガガーリンとシェパードが乗ったそれぞれの機体のコクピットの写真を掲載し、アメリカの機体の複雑さを強調する⁽³⁹⁾。アメリカの



図 4. *Life*, May 12th, 1961, 22. ガガーリンのコクピット。



図 5. *Life*, May 12th, 1961, 23. シェパードのコクピット。

機体の複雑さを示すことで、アメリカの科学・技術がソヴィエトのものより優れているという印象を読者に与える意図が、この記事には明らかに含まれている。しかし観点を変えれば、飛行の大部分を自動操縦に任せることができたソヴィエトの科学・技術の方がアメリカと比すれば優れていた、ともいえる。事実、当時のアメリカの宇宙開発に関する科学・技術はソヴィエトに大きく遅れをとっていたことが、多くの専門家によって示されている⁽⁴⁰⁾。

また、シェパードによってなされたアメリカ初の宇宙飛行が15分に満たない弾道軌道飛行であり、地球を周回することがなかったのに対し、ソヴィエトのガガーリンによってなされた世界初の宇宙飛行は、弾道軌道よりも高く長い距離を移動する地球周回軌道に乗ったものであり、地球を一周している。そして、その飛行時間も1時間30分と、シェパードのものとは比較にならないほど優れたものだった。

然るに記事は、上のように報じた。『ライフ』によるシェパードの宇宙飛行賞賛の記事は明らかに国威発揚の効果を狙ったものであり、対ソヴィエト文化政策の一端を担うものでもあったのである。また、このことは、『ライフ』が宇宙飛行士に対して不都合な記事を書くことは無かったという、序において触れたハンプリンによる証言とも一致する。宇宙飛行士のみならず、アメリカの宇宙開発計画を批判することは、アメリカを批判することと同義だったといえるだろう。故に、『ライフ』はシェパードの飛行の優位性をかくのごとく強調したのである。

b. 妻の反応

今号においても、宇宙飛行士の妻による手記が掲載されている。その中でシェパードの妻、ルイスは、夫の助言に従って打ち上げをテレビ中継で見た際の様子を記している。それによれば、50人以上の報道陣とカメラマンがシェパード家の庭の芝生に集まり、家の前の道には車と人が列をなしていたという。また、打ち上げ成功後には電報と電話が洪水の様に押し寄せた。さらに、打ち上げ直前に

シェパード一家が食卓で手を取り合い、神に祈りを捧げる様子が撮影されている⁽⁴¹⁾。打ち上げを家で見守り、夫の無事を神に祈る彼女は、1950年代後半から1960年代にかけて模範的とされた妻の姿そのものだったといえる。

4. 1963年9月27日号

1963年に、ニュー9 (New Nine) と呼ばれる9名の宇宙飛行士が新規に選出された。ニール・アームストロング (Neil Armstrong)、フランク・ボーマン (Frank Borman)、チャールズ (ピート)・コンラッド (Charles “Pete” Conrad)、ジム・ラヴェル、ジェイムズ (ジム)・マクディヴィット (James “Jim” McDivitt)、エリオット・シー (Elliott See)、トーマス (トム)・スタッフォード (Thomas “Tom” Stafford)、エドワード (エド)・ホワイト (Edward “Ed” White)、ジョン・ヤング (John Young) である。事故死したシーとホワイト以外の全員が後にアポロ計画で船長を務めており、その内の3人が月面を歩いた。彼ら9人の宇宙飛行士たちは、実質的にアポロ計画の中心的役割を担ったといえる⁽⁴²⁾。

今号では、彼らニュー9の特集が組まれている。この中で特に中心となったのは、アポロ計画において使用される予定の最先端の科学・技術に関する記事、より正確には、一般の読者にとっても理解しやすいような宇宙「らしさ」を演出する、いわば「小道具」についての記事が数多く掲載されたのである。本稿において示される第四の特徴、「最先端の科学・技術を用いて宇宙を切り開く英雄」という宇宙飛行士像が、再び強調され始めた。

a. 科学・技術

記事によれば、宇宙で食事をすることは困難を伴う作業である。この問題は、食物を乾燥させ、食事の際に特殊な装置を用いて水を加えることで解決されるという。そして写真には、新開発の宇宙食、乾燥スクランブル・エッグ、乾燥オレンジ・ジュース、乾燥牛乳、乾燥タンドリーチキンと乾燥ミックス・ベジタブ

ル、乾燥ソースつきの乾燥牛肉ステーキなどが並ぶ⁽⁴³⁾。

また、無重力状態の宇宙空間においては、食料を摂取する以外にも様々な困難が付きまとう。地球と月の間の往復など、宇宙に長期滞在する場合に想定されるのが機器の故障と修理の必要性である。しかし、ハンマーを用いるなど地球上では容易に行える作業も、無重力の宇宙空間においては困難を伴うものとなる。なぜなら、無重力の宇宙空間ではハンマーを打ちつける人間に対し重力が全く作用しないため、「作用、反作用の法則」が直に働いてしまうのである。つまり何らかの対策を採らなければ、ハンマーを打ちつけたことによって修理箇所に対して発生したのと全く同じ強さの反発力がハンマーを握る人物に対しても作用し、重力によって接地していないその人物は、反発力によって宇宙空間に押し出されてしまうことになる。記事には、そのような事故を防ぐために新たに開発された様々な工具や機器が、写真によって示されている⁽⁴⁴⁾。



図 6. *Life*, September 27th, 1963, 30-31.

また、図6のように、今号の表紙は、空軍のジェット輸送機が弾道軌道を描いて大気中を飛行する際に発生する約30秒の無重力状態の間に、チューブに入ったアップルソースを飲む訓練をするポーマン、ラヴェル、スタッフォードの三人の宇宙飛行士の様子によって構成されている。彼ら三人の身体は完全に宙に浮いており、スタッフォードは天地が逆さになっている⁽⁴⁵⁾。このような宇宙飛行士たちの姿が、当時においては目新しいものとして映ったことは想像に難くない。そしてこの種の「小道具」は、以降も頻繁に『ライフ』に登場することになる。

b. 家族

これまでの記事と同様に、今号でも、宇宙飛行士のみならず彼らの妻や子供たちの様子について取り上げられていることに触れておきたい。ニュー9それぞれの宇宙飛行士の家族写真が掲載されており、彼らの妻子の氏名と年齢も明らかにされている。また、宇宙飛行士本人による短い手記も掲載されており、その中には彼らのミッションにかける意気込みなどが語られている⁽⁴⁶⁾。このように、オリジナル7にみられた英雄としての宇宙飛行士たちのあり方と扱われ方はニュー9においても継承されていた。

5. 1965年6月18日号

1965年6月3日、アメリカ人として初めて、宇宙飛行士エド・ホワイトが地球周回軌道上での宇宙遊泳を成功させた。『ライフ』は「輝かしい宇宙遊泳⁽⁴⁷⁾」と題した写真特集を組み、その飛行を賞賛した。また、今号においても、当ミッションで用いられた科学・技術についての記事や、宇宙飛行士の家族の様子が掲載されている。

a. 科学・技術

記事によれば、ホワイトとジム・マクディヴィットはジェミニ4号で地球を62周し、ホワイトは時速2万8,000キロメートル（秒速約7.8キロメートル）で宇宙

遊泳を成し遂げた。ホワイトはその宇宙遊泳の際に、未だかつてどの宇宙飛行士も見ることができなかった地球そのものの姿を見つめ、沸き立つような陶酔感を味わった。地球は、ただそこに浮かんでいた。その光り輝く球体はどの天体よりも青く、そして限りなく神秘的だったという。そして、記事は16ページに渡ってホワイトの宇宙遊泳の連続カラー写真を示し、彼の宇宙遊泳の様子を伝えている⁽⁴⁸⁾。

また、先に触れた1963年9月27日号の記事同様、当記事においても、宇宙飛行士が使用する反動銃や宇宙服についてなどの科学的「小道具」が幾度も登場し、それらについて細かく解説がなされている。例えば、反動銃は圧縮酸素によって作動するものであり、宇宙飛行士が宇宙空間を移動する際に用いられる。また、宇宙服は、太陽光の下では華氏250度、日陰では華氏マイナス150度に達する宇宙空間で、宇宙飛行士を完全に保護することが出来るという⁽⁴⁹⁾。



画像不掲載

図 7. *Life*, June 18th, 1965, 26.

さらに、「ここに座ったまま、カリフォルニア沿岸を一目で見ることが出来る⁽⁵⁰⁾」という言葉と共に、ホワイトがジェミニ4号のハッチを開け、青く輝く地球を背景に宇宙空間を漂う様子を捉えた写真は、読者に大きな驚きと高揚感をもたらしただろう。また、図7に示したとおり、「この宇宙飛行はスタントなどではなく、ドッキング飛行や緊急修理活動の際に、未来の宇宙飛行士たちが用いなければならない技術の意図的かつ順序だったテストである⁽⁵¹⁾」という解説と共に示されたカラー写真には、青い地球を背景に、ホワイトの白い宇宙服に縫い付けられた赤と青の星条旗が鮮やかに収められている。この写真には、今後も宇宙空間においてアメリカが重要な役割を果たしていくであろうことを、読者に印象付ける効果があったとみられる。

b. 家族

先述した通り、今号においても宇宙飛行士一家の様子が掲載されている。その記事には、彼ら宇宙飛行士の家族も一般の家庭と何ら変わるところはないということを示そうとした意図がみられる。それは、マクディヴィット家の子供たちが、独占取材を許されていた『ライフ』以外の報道陣を避けるために家の中に留まるように指示されていることを紹介し、自転車に乗って近所の商店に行きガムを買いたいと子供たちが不満を洩らしていることや、ホワイト家の6歳半になる娘アンが記者のノートに落書きをし、はしゃぐ様子を報じていることから明らかである⁽⁵²⁾。

ただ、ホワイト家の11歳になる長男は非常に礼儀正しく、必ず「サー」や「マダム」の敬称をつけて報道陣に受け答えすることも紹介されている⁽⁵³⁾。このように両一家の子供たちの健やかで礼儀正しい姿が明らかにされたことで、この記事は、宇宙飛行士の妻たちが堅実に子供たちを育て上げる良き母であり、良き妻でもあるという印象を読者に与えることになった。また同時にこの記事は、宇宙飛行士たちの家庭が安定しており、宇宙飛行士たちが模範的な父親であり夫であるということを読者に示すものでもあった。

6. 1967年2月10日号

1967年1月27日、打ち上げカウントダウンのシミュレーション中、発射台に据えられたアポロ1号の司令船内で火災事故が発生し、ガス・グリソム、ロジャー・チャフィー（Roger Chaffee）、エド・ホワイトの三人の宇宙飛行士が死亡した。純酸素100パーセントで満たされた司令船内部で配線不良によるスパークが発生し、爆発的な火災が生じたのである。機内からはハッチを開けることができないよう設計されていたことも、事態を深刻化させる一因となった。アメリカ人として初めて宇宙遊泳を成功させたホワイトは、アメリカ空軍士官学校のあるウェスト・ポイントに、そして、オリジナル7の一人でベテランのグリソムと新人宇宙飛行士のチャフィーはアーリントン国立墓地に葬られた⁽⁵⁴⁾。

この事故を受けて、1967年2月10日号の『ライフ』は、「英雄たちへの敬礼と告別」と題した記事を掲載した。そこでは、アーリントン国立墓地に葬られたグリソムとチャフィーの葬儀と、ウェスト・ポイントで行われたホワイトの葬儀の様子が詳らかにされている。記事は以下のように始まる。

とある晴れつつも肌寒い日、共に働き、共に死んだ三人の勇敢な男たちに、最後の敬礼が捧げられた。ガス・グリソムとロジャー・チャフィーは、最大級の名誉と共にアーリントン国立墓地に葬られ、ウェスト・ポイントではエド・ホワイトの厳粛な軍隊式の葬儀が執り行われた。両地は、抑制された悲しみに覆われた。アーリントンでは、ジョンソン大統領（Lyndon B. Johnson）が彼らの妻たちにささやきかけ、呆然としている子供たちを落ち着かせ、そして青白く震える両親を慰めた。大統領は、国家への奉仕の中で命を落とした者の家族と共に悲しみを共有したが、その厳粛な彼の態度は、悲しみの共有がいかに辛いものであるかを物語っていた⁽⁵⁵⁾。



図 8. *Life*, February 10th, 1967, 20-21.

記事にはその他にも、葬儀に参列した宇宙飛行士たちがそれぞれの所属する軍の礼服を着用し、敬礼の姿勢をとる様子や、背中に人を乗せていない三頭の黒馬が棺を引いていく様子、また悲痛な面持ちの宇宙飛行士の妻や、子供たちの様子などが掲載された。そしてジョンソン大統領は、三人の宇宙飛行士たちを「勇敢な男たち」と評し「国家の悲しみ」を表現したと、記事は伝えている⁽⁵⁶⁾。

事実、このアポロ1号の事故は大きな衝撃をもって迎えられた。ABCニュースは事故直後、即座に臨時ニュースを放送し⁽⁵⁷⁾、『ニューヨーク・タイムズ』紙はトップ記事で「三人のアポロ宇宙飛行士が火災事故で死亡。グリソム、ホワイト、チャフィー、発射台でのテスト中にカプセルに閉じ込められる⁽⁵⁸⁾」と報じた。

今号の記事は、オリジナル7の時代から続く、宇宙飛行士は国家的目標を達成するために国へ奉仕する模範のかつ英雄的な人々だというイメージを、否が応にも読者へ再び印象付けることになった。そもそも、アーリントン国立墓地に葬られるのは国家へ多大な貢献をなした人々のみである。『ライフ』は、その葬儀に大統領が参列し「勇敢な」宇宙飛行士たちの死を「国家の悲しみ」と表現したこと、そしてその家族らが悲しみにくれる様子などを報じた。その結果、勇敢で愛国的で家族を愛する宇宙飛行士という姿がこれまで以上に強調されることになったといえる。また、大統領が宇宙飛行士たちの死を「国家の悲しみ」と表現したことには、英雄としての宇宙飛行士という職業が、他ならぬ大統領によって権威

付けられるという効果もあった。そして、宇宙飛行士たちが宇宙服ではなく各々が属する軍の礼服を着て敬礼をする姿は、彼らが今も軍人であり、国家へ奉仕するために働いていることを、また宇宙開発は常に危険と隣り合わせであることを読者に再認識させたといえるだろう。

7. 特別号『月へ、そして帰還』

1961年5月に行われたケネディ大統領による演説以降、合衆国は国を挙げてアポロ計画を推進してきた。そしてついに、1969年7月20日、アポロ11号の船長、ニール・アームストロングと月着陸船パイロット、バズ・オールドリンの二人のアメリカ人宇宙飛行士は人類として初めて月面へ着陸し、翌21日その表面を歩き、彼らは月周回軌道で待機していた月司令船パイロット、マイケル（マイク）・コリンズ（Michael “Mike” Collins）と共に、無事、地球へ帰還した。

アポロ11号による人類初の月面到達を記念し、『ライフ』は異例の特別号を出版した。今号は写真誌としての特性を活かし、アポロ11号のクルーが撮影した写真を30ページ以上に渡って掲載している。その他にも、『ライフ』の記者による取材で構成された、アームストロング、オールドリン、コリンズの三人の宇宙飛行士たちの軌跡についての記事や、彼らが家族と共に過ごす様子、そしてこれまでのアメリカの宇宙計画の成果についての記事などがみられる。今号においても、これまでの記事同様、彼ら三人は妻と子供を愛する家庭的な男たち、あるいは勇敢で愛国的な男たちとして描かれたのである⁽⁵⁹⁾。

しかし注目すべきは、これまでの宇宙飛行士とは違い、彼らが単に模範的で英雄的な未来を担うアメリカ人として描かれただけではなく、「科学・技術によって達成される人類の進化を実現化する存在」として規定されたということである。確かにこれまでの宇宙飛行士たちも、最先端の科学・技術と一揃いの存在であり、宇宙を切り開く英雄とされた。しかし以下にみるように、アポロ11号のクルーたちに与えられたイメージは、それをはるかに凌駕するものだった。

ルドン・ウェインライト（Loudon Wainwright）による「人類が惑星という

名の揺りかごを離れた日の夜明け」と題された記事は、アポロ11号の打ち上げを次のように伝えている。ウェインライトは、オリジナル7の時代からアメリカの宇宙開発を見守り、宇宙飛行士たちに取材を行い、彼らに熱狂してきた一人だった。しかしアポロ1号の火災事故の後、ウェインライトの宇宙飛行士に対する熱意は徐々に冷めていってしまった。しかし、ウェインライトの気持ちは「神によって」変化を遂げたという。それは、アメリカの宇宙開発計画の総指揮を執っていたワーナー・フォン・ブラウン（Wernher von Braun）が、打ち上げ前夜の演説で次のように述べた時だった⁽⁶⁰⁾。

ニール・アームストロングが月面に一步を踏み出す時に我々が手にするものは、人類の進化における完全に新しい一步です⁽⁶¹⁾。

この記事の題に用いられた「揺りかご」という比喩は、人類が心地よく保護された地球という環境を抜け出し、新たな段階へと「進化」することを表している。この象徴的な題は、記者のウェインライトのみならず、当時のアメリカによる、アポロ計画に対する評価を的確に表現したものだと考えられる。

確かに主語は、「アメリカ」ではなく「人類」である。だが、事実上この「進化」を牽引していったのは、他ならぬアメリカだった。むしろフォン・ブラウンによるこの言葉は、アメリカこそが人類を代表し史上初の月面到達を成功させ、ひいては人類の進化を達成させた、というアメリカ人の意識の表れであるといえよう。それは、アポロ11号の月着陸船の前脚に取り付けられた銘板にある「われわれは全人類のために、平和のうちに訪れた⁽⁶²⁾」の言葉にも表れている。つまり、地球という揺りかごから抜け出すことの叶わなかった幼年期の人類は、アメリカによって、さらにその上の段階に達したのである。それ故、その立役者となったアポロ11号のクルーたちは、これまでの宇宙飛行士たちを超えた英雄、つまり人類の「進化」を科学・技術によって実現化した存在として扱われ、それが「人類が惑星という名の揺りかごを離れた日の夜明け」という題を生み出した

のである。月面に翻る星条旗とその傍らに立つ宇宙飛行士の写真は、「アメリカの科学・技術によって達成された人類の進化」をこれ以上ない形で示したといえる。



図 9. *Life Special Edition: To the Moon and Back*, 1969, 17-18.

III. 結論

1. 1960年代アメリカのエートス

a. 家族

序論でみた通り、宇宙飛行士たちの中には飲酒や女性などの問題を抱える者がいた。然るに『ライフ』誌は彼らを「腫れ物にでも触るように」扱い、彼らに不都合なことを書くことは決してなかった。彼らは、「アメリカ的な美徳と魅力を備えた模範的かつ英雄的な、未来を担うアメリカ人」として描かれた。

この宇宙飛行士のイメージを生み出したものは、1950年代後半から1960年代にかけてアメリカ社会において重んじられ、美徳とされた社会通念、いわば当時のアメリカ社会のエートスだったと考えられる。

第一に、宇宙飛行士たちは、妻や子供、両親など家族を愛する男として描かれ、彼らの妻たちは、国家と夫を信頼し堅実に子供を育て上げる良妻賢母として描かれた。そのような彼らの姿は、どの宇宙飛行士の記事にも登場するものだった。この宇宙飛行士のイメージが生み出されたのは、当時、家族的であることが一家の長に相応しいあり方だとされていたからである。

家族、社会、女性史を専門とするステファニー・クーンツ (Stephanie Coontz) によれば、1950年代においては、家族は社会における最も基本的な制度として賞賛され、すべての階級、人種集団に爆発的なベビーブームが起り、アメリカは「子供中心」社会となった。そして、夫と子供の世話に専念することが女性たちにとっての最重要課題になった。また、女性だけではなく男性たちも、自らのアイデンティティと自己イメージを、家庭内での役割や親としての役割に見出すように求められた。結果として、男性たちにとっては家庭的であることが「ミドルクラスのステイタスと上昇志向を示す指標」となったという⁽⁶³⁾。このアメリカ社会における変化が、宇宙飛行士たちに与えたであろう影響を無視することはできない。

また、1960年代後半において、アメリカの離婚率が急上昇したことに目を向ける必要があるだろう。15歳以上の既婚女性1,000人当りの離婚者数は、1950年の10.3人と1952年の10.1人を除き、1950年代を通して9人台という水準で推移していた。しかしそれが一転、1966年には10.9人、そして1970年には14.9人が離婚している⁽⁶⁴⁾。当時のアメリカは、女性の社会進出が大きなテーマとして取り上げられた時代でもあった。アメリカの家族のあり方は、宇宙開発計画が最も盛んだった1960年代を通して、大きな変化を遂げていたのである。

しかし1950年代に誕生した宇宙飛行士とその妻たちは、これまで通り「模範的な」家族であり続けねばならなかった。離婚率が上昇すればするほど、彼らは「古き、良き」家族のあり方を、身をもって示さなければならなかったといえるだろう。それ故、1960年代においても、宇宙飛行士たちは良き父であり良き夫とされ、婦人たちは良き母、そして良き妻たちだとされたのである。

また、妻子がおり、彼らに何不自由なく生活させているということが、成人男性の人格、性格の安定を示す一つの指標だった。当時、独身男性は「未熟者」、「幼兒的」、「ナルシスト」、「異常」あるいは「病的」とさえ言われたという⁽⁶⁵⁾。

さらに、妻たちが最も宇宙飛行士と近い距離にいる「一般人」だったことには大きな意味があったといえる。一般人たる彼女らが、宇宙飛行士たちに対してどのような意見を持っているのかということは、一般の読者にとっては大きな関心事だったのではないだろうか。それ故に『ライフ』には、あれほどの頻度で宇宙飛行士の家族と妻についての記事が掲載されたのである。

b. 勇敢さと愛国心

第二に、宇宙飛行士たちは、勇敢で愛国的な男として描かれた。彼らの多くが軍に所属するテスト・パイロット出身だったことは、そのイメージを強固にする一因だった。彼らは自らが備える冷静さ、精確さ、状況判断力などを自らの実戦経験やテスト飛行の経験を通して主張した。彼らは、「ライト・スタッフ」を備えていた。

また、初期の宇宙開発計画においてはアメリカのロケット技術は未熟であり、マーキュリー計画で用いられたロケットは、何度も打ち上げ失敗を繰り返していた。戦争体験やテスト飛行のみならず、非常な危険を伴う最先端の科学・技術を用いた計画に、宇宙飛行士たちが自ら進んで無給で携わっていたことは、彼らの勇敢さと愛国心を示すものでもあった。アポロ1号の三人の犠牲者についての記事は、そのことを読者に再確認させるものだった。

さらに、彼らが軍人だったことは、冷戦期アメリカにとっては大きな意味を持っていた。なぜなら、彼らはソヴィエトをはじめとする東側陣営から、祖国アメリカを防衛していたからである。この経歴が、彼らを勇敢で愛国的な人々足らしめた。

1950年代後半から1960年代の米ソ冷戦の様相が、まさに緊迫したものだったことを忘れてはならない。ソヴィエトによるスプートニク1号の打ち上げ成功以

降、アメリカ国内でミサイル・ギャップ論争が過熱し、ミサイルの開発が急がれた。そして、1962年のキューバ危機では、世界を二分した全面核戦争が現実のものに成りかねない危機的な状況に陥った。さらに、1965年にはヴェトナム戦争が始まり、共産圏の一層の拡大が懸念された。1960年代末には、デタントと呼ばれる緊張緩和の時代に入ったが、それでもなお、両国家の関係は激しい緊張状態にあったのである。

このような時代のアメリカにおいて、自らの命の危険を顧みずに自発的に合衆国へ奉仕することは、特に賞賛されるべき模範的で英雄的な行動だったといえるだろう。また、それが故に、宇宙飛行士たちも『ライフ』に自らの実戦経験を好んで語ったのだと考えられる。

c. キリスト教

第三に、熱心なクリスチャンである者はそのことを強調した。特にグレンとその妻は、自らのキリスト教信仰とそれを中心とした生活について語った。ジョンがクリスマスの意味を教えるために子供たちにとった行動は、彼が熱心なキリスト教徒であり、強い倫理観を備えていたことを読者に強烈に印象付けただろう。また、『ライフ』は、アメリカ初の宇宙飛行を成功させたアラン・シェパードの妻、ルイスが、打ち上げを家で見守り夫の無事を神に祈る様子を報じた。

1960年代後半においてもなお、キリスト教は宇宙飛行士たちの属性として重要な役割を担っていた。例えば、1968年のクリスマス・イヴに世界初の有人月軌道周回飛行を成功させたアポロ8号では、月軌道上から地球を撮影しながら、宇宙飛行士たちが創世記の冒頭を読み上げる様子をテレビ中継している⁽⁶⁶⁾。

宇宙飛行士とその家族たちがキリストとの関わりを前面に押し出したのは、これも同じく当時の社会通念が宇宙飛行士たちの行動に影響を与えたからである。時代は遡るが、1950年代はマッカーシズムの時代だった。すでに1938年に発足していた非米活動委員会（the House Un-American Activities Committee: HUAC）の活動が盛んになり、彼らは「非アメリカ」的なものを共産主義的で

不道德だとし、激しく糾弾した。反共産主義は、社会ヒステリーの域にまで達したのである。そして非キリスト教的なものは、非アメリカ的であるとされた。1956年の『十戒⁽⁶⁷⁾ (*The Ten Commandments*)』、1959年の『ベン・ハー⁽⁶⁸⁾ (*Ben-Hur*)』など、キリスト教的な映画が数多く作られたことにも、キリスト教が社会において大きな関心事であったことが表れている。これらの映画は、1950年代にハリウッドに吹き荒れた「赤狩り」の影響によって誕生していた。

宇宙飛行士という職業が誕生したのは1959年だが、非キリスト教的なものは非アメリカ的であるという社会通念が、1960年代においてもなお依然として蔓延していたことに疑いの余地は無い。

また、1960年代は、1963年のシドニー・ミード (Sidney E. Mead) による『アメリカの宗教⁽⁶⁹⁾ (*The Lively Experiment*)』や、1965年のハーヴィー・コックス (Harvey G. Cox) による『世俗都市⁽⁷⁰⁾ (*The Secular City*)』など、キリスト教神学者からのアメリカ社会への問題提起が多くなされた時期でもあった。先に触れた宇宙飛行士の家族像同様、社会が様変わりしつつある1960年代においては、宇宙飛行士たちはより一層「古き、良き」美德を体現する存在であることが求められたのである。彼らは明らかに、1950年代のアメリカ社会を引きずっていた。

上記の三つの宇宙飛行士の特徴は全て、当時のアメリカ社会のエートスに由来していた。いわば、彼らは模範的市民のあるべき姿を体現していたのである。アメリカを代表する彼らが、スキャンダラスに描かれてはならなかった。

さらに、ここで『ライフ』という雑誌の性格についても考慮しなければならないだろう。創設者のヘンリー・ルース (Henry R. Luce) は、キリスト教伝道師だった父の強い影響を受け、アメリカに対する強い忠誠心を植え付けられて成長したという。それは、「私はアメリカに対してあまりにロマンティックで理想的な見方を手に入れたのだと思う」と、自ら後に語るほどのものだった⁽⁷¹⁾。

彼はイエール大学を卒業後、『タイム (*Time*)』、『フォーチュン (*Fortune*)』、『ライフ』などの雑誌を創設し、自ら筆を取ることもあった。例えば彼は、1941年2月7日号の『ライフ』に「アメリカの世紀 (*The American Century*)」と

題する記事を掲載し、ヨーロッパの戦線に介入しない合衆国に対し、「世界で最も強大で不可欠な国家としての義務と機会」を自覚し、その影響力を行使せよ、と主張している⁽⁷²⁾。このような保守的な『ライフ』が、宇宙飛行士らを「家族を愛する愛国的なクリスチャン」として描いたのは、当然のことだった。

だが、それだけでは「新時代」の英雄にとっては不足だった。1950年代後半から1960年代の英雄として宇宙飛行士を最も強く特徴付けていたものは、彼らの持つ、いわばエリートとしての魅力だった。つまり、第四の特徴、宇宙飛行士たちは何よりも先ず、「最先端の科学・技術を活用し、宇宙を切り開く英雄」とされたのである。

2. アメリカの未来の体現者

宇宙飛行士たちは事実、「エリート中のエリート⁽⁷³⁾」だった。『ライフ』の記事で披露された数々の科学・技術は、そのイメージをより一層高めるための「小道具」として機能していた。宇宙飛行士たちが、「無学な」テスト・パイロットでなかったことは特に重要である。特にニュー9以降、宇宙飛行士たちの選考基準が一段と高められ、彼らには、工学士あるいはそれに相当する学力を有していることが求められた⁽⁷⁴⁾。例えばピート・コンラッドはプリンストン大学で学士号を⁽⁷⁵⁾、デイヴィッド・スコット (David Scott) はマサチューセッツ工科大学で修士号を⁽⁷⁶⁾、そして、バズ・オルドリンは同じくマサチューセッツ工科大学で博士号を取得している⁽⁷⁷⁾。事実、宇宙飛行士たちは、自らが搭乗するアポロ宇宙船の設計に関わらなければならなかった⁽⁷⁸⁾。彼らには、高度な工学的知識が求められたのである。宇宙飛行士たちは、いわば文武両道のエリートだった。

また、アポロ計画は、これまでに人類によって成し遂げられてきたどの計画よりも、「科学・技術的」だったといえる。例えば、アポロ計画のスケールは、これまでの宇宙開発計画とは比較にならないほど壮大なものだった。地球の直径は約1万2,700キロメートル、月の直径は約3,400キロメートルであり、両者の間は約38万4,400キロメートル離れている。地球をバスケットボールに例えると、月

は地球から約7メートル離れたところにある野球ボールになる。アポロ計画では地球と月を往復したが、月との往復はそれまでの地球周回飛行よりはるかに精確さを求められるものだった。アポロ以前に成し遂げられた地球周回飛行の最高到達高度はわずか1,370キロメートルであり、バスケットボールではその表面から2.5センチメートルあまり浮き上がったところに過ぎなかった⁽⁷⁹⁾。

また、アポロ計画で宇宙飛行士を月面に運ぶために開発されたサターンV・ロケット（Saturn V）の全長は約111メートル、直径10メートルで、自由の女神を縦に二つ並べたものよりもさらに20メートルほど高かった。第一段ロケットに動力を与える5基のF1ロケット・エンジンはそれぞれ直径3.7メートルのノズルを有し、一秒に約20トンもの燃料を消費した。打ち上げ時には、これらのエンジンが、およそ約3万4,000トンの推進力を供給する。このエネルギーは、およそ1億6,000万馬力に相当した。そして、クルーが搭乗するアポロ司令船の航行速度は、最高で時速約4万キロメートル、実に秒速約11キロメートルに達した⁽⁸⁰⁾。これは、東京・大阪間をわずか37秒で結ぶ速度である。

エンジン工学、航空宇宙工学、誘導システム、電子工学、通信、医学、生理学、環境制御、あるいは完全に新しい金属や繊維、果ては宇宙食など、NASAとアポロ計画にまつわる全てのことが、月を目指すために新たに開発された最先端の科学・技術の成果によって成り立っていた。ロケット・サイエンス（rocket science）という英語表現は「非常に高度な理論、あるいは科学・技術」を意味するが、これはアポロ計画をはじめとする、アメリカの宇宙開発計画に用いられた科学・技術の水準と要求の高さを示すものであるといえよう。

そして、1960年代、宇宙はアメリカにとっての未来が展開されるべき場だった。オリジナル7のガス・グリソムは『ライフ』1961年3月3日号で、マーキュリー計画が、「人類が存在する限り続けられる偉大な計画」のさきがけとなると考えていることを明かしている⁽⁸¹⁾。さらに、1959年9月14日号では、ディーク・スレイトンが、「今後千年の間に人類が取り組むであろうことの最初の段階」に彼ら宇宙飛行士はいるのだと思う、と記している。そして彼は、アメリカは今後

50年で太陽系以外の星を探索することができるようになると思う、と続けている⁽⁸²⁾。

グリソムやスレイトンによる発言は、アメリカの未来は宇宙空間において展開されるだろう、という1960年代のアメリカに見られた未来観の表れだった。つまりアメリカにとって、宇宙は即ち未来を意味したのである。

ところで、この未来観は、科学・技術によって人類は発展し続け、それを担うのは他ならぬ科学・技術大国アメリカである、というアメリカに特有な、運命論・進歩史観的な歴史観に由来していると考えられる。この歴史観は、19世紀後半以降アメリカが科学・技術の最先端を常に走り続けてきたことに由来する。そして、この歴史観はアメリカを月へと導いた原動力でもあった。宇宙開発競争においてソヴィエトに幾度となく先行を許したアメリカにとって、宇宙空間という未来が展開されるべき場への一番乗りは、他でもなくアメリカによって実現されるべきものだったのである⁽⁸³⁾。そして、宇宙飛行士たちは、その歴史観の正しさを証明する英雄だった。

オリジナル7のジョン・グレンが自覚していたように⁽⁸⁴⁾、彼らはまさにアメリカの未来を担っていた。そして、アポロ11号のクルーたちは、ついに月面に到達することによって人類を新たな段階へと引き上げた。月面に降り立った時、アポロ11号船長のニール・アームストロングが発した「これは一人の人間にとっては小さな一歩だが、人類にとっては偉大なる跳躍である⁽⁸⁵⁾」という言葉や、前掲の「人類が惑星という名の揺りかごを離れた日の夜明け」という『ライフ』の記事の題にも、上記の進歩史観を見出すことができるのは興味深い。そして、この進歩史観を身をもって実証する存在だったからこそ、彼らは新時代の英雄たりえたのである。

3. 課題と展望

概観してきたとおり、1950年代後半から1960年代にかけて、宇宙飛行士は四つの特徴を備えた存在として描かれ、その英雄像は当時のアメリカのエート

ス、そして未来観を顕著に反映していた。今後、アメリカによる有人火星飛行が現実のものとなった際、メディアは彼ら宇宙飛行士をどのように描くのか、そしてどのような人物が選抜されるのか、注目すべきところである。

だが、本稿が扱ったのはアメリカの宇宙飛行士のみであり、もう一方の宇宙開発の雄、ソヴィエトの宇宙飛行士像を解明するには至らなかった。また、宇宙飛行士たちの妻をジェンダー研究の枠組みの中で扱うことが叶えば、より大きな成果を挙げることが出来ただろう。これらは今後の課題としたい。

最後に、アメリカの宇宙飛行士全員が、白人男性だったことにも触れなければならない。この事実を前にして、黒人をアメリカの代表として選ぶことが政治的に難しかったからではないか、と推測することは容易である。しかし注目すべきことに、ケネディ大統領は黒人の就学率を高めるために黒人宇宙飛行士を誕生させようとしていたという⁽⁸⁶⁾。

実際に、エド・ドワイト (Ed Dwight) という黒人パイロットが、宇宙航空研究パイロット学校を卒業したことがあった。だが彼は、宇宙飛行士プログラムに志願し不合格となっている。その学校の校長だったチャールズ (チャック)・イエーガー (Charles "Chuck" Yeager) によれば、ドワイトには入学に必要な飛行経験や工学知識の素養が不足していたにもかかわらず、ホワイトハウスが空軍に圧力をかけて彼を宇宙航空研究パイロット学校に入学させたのだという。つまり、彼の不合格は人種的偏見によるものではなく、純粋に彼の能力の問題だった⁽⁸⁷⁾。

また、1967年、空軍は宇宙航空研究パイロット学校の黒人卒業生ロバート・ローレンス (Robert Lawrence) を、有人軌道周回実験計画のパイロットに選抜した。しかしその後まもなく、ローレンスはF-104ジェット機で墜落、死亡している⁽⁸⁸⁾。黒人宇宙飛行士が誕生しなかった理由は、以上の通りである。

これらを事実として受け入れれば、宇宙飛行士の選抜は肌の色によるものではなく、あくまでも技術的な問題だったといえる。これには一定の説得力がある。技術的に不適格な者を宇宙飛行士として宇宙に送り、取り返しのつかない惨事を

招いてしまうことは、国家の威信に関わる問題だからである。アポロ11号で月司令船パイロットを務めたマイク・コリンズは、当時の黒人や女性の中に、宇宙飛行士になる際に有利となる、航空関係の技術者やベテランのテスト・パイロットがいなかったことも、同時に黒人の、あるいは女性の宇宙飛行士が誕生しなかった一因だとしている⁽⁸⁹⁾。

「仮に」当時のアメリカに黒人宇宙飛行士が誕生していたとすれば、『ライフ』は彼のことをどのように報じただろうか。本稿では、あくでも『ライフ』が選抜された宇宙飛行士らにどのような英雄像を与えたのか、ということのみを扱った。しかし、穿った見方ではあるが、当時の『ライフ』にとって、宇宙飛行士全員が白人男性だったことは、彼らを英雄として扱う上で好都合だったといえるだろう。

注

- (1) Andrew Chaikin, *A Man on the Moon: The Voyages of the Apollo Astronauts* (London: Penguin Books, 2007), 32. 当文献の邦訳は、アンドリュー・チェイキン『人類、月に立つ(上)(下)』亀井よし子訳(NHK出版、1999年)に従った。彼らには様々な「役得」があった。格安の条件で家が提供され、ディーラーからはスポーツカーのボルヴェットを無料で与えられた。さらに1ドルでモーターに宿泊することができ、アメリカン・フットボールのチーム、ヒューストン・オイラーズの試合のチケットも無料で手に入れることができるなど、数え上げればきりが無いほどの宇宙飛行士としての特典があったという。Ibid.
- (2) 宇宙飛行士のギヴン・ネームの後ろに括弧で括られたものがあるが、これらは彼らのニック・ネームである。宇宙飛行士たちはお互いにニック・ネームで呼び合っていたため、宇宙飛行士に関する研究書も通例、ニック・ネームを用いて彼らの名を表記している。なお本稿では、初出の場合は「ギヴン・ネーム(ニック・ネーム)」・「ファミリー・ネーム」を用い、二度目以降の場合は「ニック・ネーム」・「ファミリー・ネーム」の形式で記述する。また、ニック・ネームが用いられなかった宇宙飛行士については、実名どおりの表記とする。
- (3) Loudon S. Wainwright, "The Chosen Three for First Space Ride," *Life*, March 3rd, 1961, 24.
- (4) ハンプリンによる記事は、Dora Jane Hamblin, "Neil Armstrong Refuses to 'Waste

- Any Heartbeat," *Life*, July 4th, 1969, 18-21 等が挙げられる。アポロ11号による月面到達直前に書かれた当記事では、彼女は人類として初めて月面に一步を踏み出す予定だったニール・アームストロング (Neil Armstrong) 一家の取材をしている。
- (5) Chaikin, *A Man on the Moon*, 633.
 - (6) Andrew Smith, *Moondust: In Search of the Men Who Fell to Earth* (New York: Harper Perennial, 2006), 112, 123, 261-263. 当文献の邦訳は、アンドリュー・スミス『月の記憶——アポロ宇宙飛行士たちの「その後」(上)(下)——』鈴木彩織訳(ヴィレッジブックス、2006年)に従った。
 - (7) Chaikin, *A Man on the Moon*, 633.
 - (8) 米軍のうちジェット戦闘機を有しているのは空軍、海軍、海兵隊だが、その中でもジェット戦闘機パイロットとして空を飛ぶことが許されるのはごく少数である。さらに、テスト・パイロットの職を手に入れることができるのは、それらジェット戦闘機パイロットの中でも厳しい訓練と試験を通過した者のみである。テスト・パイロットの職務についてはこれまでも様々な場で語られているが、James R. Hansen, *First Man: The Life of Neil A. Armstrong* (New York: Simon & Schuster Paperbacks, 2006), 117-159 が特に詳しい。
 - (9) Tom Wolfe, *The Right Stuff* (New York: A Bantam Book, 1980), 16.
 - (10) マーキュリー計画は、アメリカ初の有人宇宙飛行計画である。その後、地球周回軌道上でのドッキングやランデブー、宇宙遊泳を目指すジェミニ計画 (Project Gemini)、そして月面到達を目指すアポロ計画 (Apollo Program) が続いた。
 - (11) Walter Schirra, "There Won't Be Time to Send for the Manual," *Life*, September 14th, 1959, 37.
 - (12) Virgil Grissom, "You Just Don't Have Time to Get Frightened," *Ibid.*, 39; Alan Shepard "I Know It Can Be Done and I Want to Do It," *Ibid.*, 40; Donald Slayton, "This Is Going to Be One Hell of a Thrill," *Ibid.*, 42.
 - (13) Gordon Cooper, "I've the Normal Desire to Go a Little Higher," *Ibid.*, 28.
 - (14) Schirra, "There Won't Be Time to Send for the Manual," *Ibid.*, 37.
 - (15) Scott Carpenter, "This Is Something I Would Give My Life for," *Ibid.*, 41.
 - (16) Grissom, "You Just Don't Have Time to Get Frightened," *Ibid.*, 39.
 - (17) Shepard, "I Know It Can Be Done and I Want to Do It," *Ibid.*, 40.
 - (18) Carpenter, "This Is Something I Would Give My Life for," *Ibid.*, 41.
 - (19) Smith, *Moondust*, 86-97.
 - (20) "The Astronauts: Ready to Make History," *Life*, September 14th, 1959, 32-33.
 - (21) *Ibid.*, 29-31, 36.
 - (22) James "Jim" Lovell in an interview with David Sington in *In the Shadow of the Moon*, DVD, directed and produced by David Sington (ThinkFilm, 2008): "And it looked

- like a very, you know, quick way to have a short career.”
- (23) “Seven Brave Women Behind the Astronauts: Spacemen’s Wives Tell of Their Inner Thoughts and Worries,” *Life*, September 21st, 1959, 142.
- (24) Rene Carpenter, “There Are No Dark Feelings,” *Ibid.*, 147.
- (25) Betty Grissom, “I Guess I Will Worry,” *Ibid.*, 152.
- (26) Trudy Cooper, “I Want to Watch It Go,” *Ibid.*, 157.
- (27) Marjorie Slayton, “I Have Never Been Nervous,” *Ibid.*, 160.
- (28) Anna Glenn, “No Title,” *Ibid.*, 142.
- (29) Cooper, “I Want to Watch It Go,” *Ibid.*, 157; Slayton, “I Have Never Been Nervous,” *Ibid.*, 160.
- (30) Louise Shepard, “Just Go Right Ahead,” *Ibid.*, 150.
- (31) Glenn, “No Title,” *Ibid.*, 142.
- (32) *Ibid.*
- (33) “From the Personal Album of John Glenn: a Man Marked to Do Great Things,” *Life*, February 2nd, 1962, 24.
- (34) “U. S. Hurls Man 115 Miles into Space; Shepard Works Controls in Capsule, Reports by Radio in 15-Minute Flight,” *New York Times*, May 6th, 1961, 1.
- (35) “Soviet Orbits Man and Recovers Him; Space Pioneers Reports: ‘I Feel Well’ ; Sent Messages while Circling Earth,” *New York Times*, April 12th, 1961, 1, 22.
- (36) “Russian Success Hailed by World; British Scientist Says Soviet is ‘About 3 Years’ Ahead of U.S. in Technology,” *New York Times*, April 13th, 1961, 15.
- (37) ガガーリンの飛行を受けて、ケネディ大統領は1961年5月25日に議会演説を行い、アメリカは1960年代の内に人類を月に送ると宣言した。19世紀後半以降アメリカが築き上げてきた科学・技術大国としての威信、いわばアメリカの進歩史観的で運命論的な歴史観がスプートニクとガガーリンによって打ち砕かれ、結果アポロ計画が生まれたことについては、拙論「“Manifest Destiny” の20世紀の展開——スプートニク危機とアポロ計画——」『ICU比較文化』第42号（国際基督教大学比較文化研究会、2010年）所収、1-35頁を参照。
- (38) “The Astronauts: Ready to Make History,” *Life*, September 14th, 1959, 26: “...he will be the first American, perhaps the first man, to be rocketed into the dark stillness of space.”
- (39) “Shepard and U.S.A. Feel ‘AOK’,” *Life*, May 12th, 1961, 22-23.
- (40) ここでは一例を挙げるにとどめる。的川泰宣は、宇宙開発競争においてアメリカがソヴィエトに先行を許した原因のひとつに、それぞれの国家のロケット開発の目標設定の違いを挙げる。ソヴィエトは第二次世界大戦後の国家防衛の基本がロケット・ミサイルにあると信じ、当時の重い核弾頭に合わせた大型のロケットを開発の

目標に据えていた。しかし、アメリカは核爆弾の小型軽量化を目標としており、それに見合った小型のロケットを開発していた。それ故に米ソのロケットの推進力には大きな隔たりが生まれ、それがソヴィエトの先行を生んだのである。的川泰宣『月をめざした二人の科学者——アポロとスプートニクの軌跡——』（中公新書、2000年）、89頁。

- (41) Louise Shepard, "The Spaceman's Wife: 'Alan Was in His Right Place,'" *Life*, May 12th, 1961, 28-29.
- (42) オリジナル7の中でアポロ計画において船長を務めたのは、アメリカ初の宇宙飛行士、アラン・シェパードとウォリー・シラーの二人のみである。なお、アポロ計画で実際に月を目指し着陸を成功させたのは、アポロ13号を除く11号から17号までの6回であり、アポロ1号から6号までは無人計画、7号から10号までは地球周回および月周回計画だった。
アポロ13号は、月への着陸を果たせずに地球へ帰還した。月への途上、機械船内の電線がショートを起こし酸素タンクが爆発、危機的な状況に陥ったのである。しかし、地上の管制センターからの指示で宇宙船の電力消費を徹底的に押さえ、月着陸船を救命ボートとして使用したことが功を奏し、三人のクルーを乗せた司令船オデッセイ号は、1970年4月17日に無事大西洋に着水した。Gene Kranz, *Failure Is Not an Option: Mission Control from Mercury to Apollo 13 and beyond* (New York: Berkley Books, 2001). なお、著者ジーン・克蘭ツは、アポロ13号の飛行主任を務めた人物である。
- (43) "Head over Heels for What's Out There," *Life*, September 27th, 1963, 32.
- (44) "The Tools of the Trade are Zerts and Spunfits," *Ibid.*, 36-38.
- (45) *Ibid.*, cover page.
- (46) "Their Families and Own Stories," *Ibid.*, 39, 81, 84, 86A, 86B, 88-90.
- (47) "The Glorious Walk in the Cosmos: Astounding Camera Log of the Gemini 4 Triumph," *Life*, June 18th, 1965, 26.
- (48) *Ibid.*, 26-40A.
- (49) *Ibid.*
- (50) *Ibid.*, 31: "I can sit out here and see the whole California coast."
- (51) *Ibid.*, 26.
- (52) Jane Howard, "Down on Earth: Their Kids Plotted for Bubble Gum," *Ibid.*, 40B.
- (53) *Ibid.*
- (54) アポロ1号の火災原因については、Charles Murray and Catherine Bly Cox, *Apollo* (Burkittsville, Maryland: South Mountain Books, 2004), 180-181, 185-218 が最も詳細である。
- (55) "For the Heroes, Salute and Farewell," *Life*, February 10th, 1967, 21.

- (56) *Ibid.*, 20-29.
- (57) *In the Shadow of the Moon*.
- (58) “3 Apollo Astronauts Die in Fire; Grissom, White, Chaffee Caught in Capsule during a Test on Pad,” *New York Times*, January 28th, 1967, 1.
- (59) *Life Special Edition: To the Moon and Back*, 1969, 1-60.
- (60) Loudon Wainwright, “The Dawn of the Day Man Left His Planetary Cradle,” *Life Special Edition: To the Moon and Back*, 71-72.
- (61) *Ibid.*, 72: “What we will have attained when Neil Armstrong steps down upon the moon is a completely new step in the evolution of man.” 月面における人類の進化というモチーフは、1968年公開の映画、『2001年宇宙の旅 (2001: A Space Odyssey)』の強い影響を感じさせる。2001: A Space Odyssey, DVD, directed and produced by Stanley Kubrick (MGM, 2007). また、このタイトルは、1953年に発表されたアーサー・C・クラークのSF小説、『幼年期の終り (Childhood's End)』を髣髴とさせるものでもある。Arthur C. Clarke, *Childhood's End* (London: Gollancz, 2010)
- (62) Chaikin, *A Man on the Moon*, 212: “We came in peace for all mankind.”
- (63) Stephanie Coontz, *The Way We Never Were: American Families And The Nostalgia Trap* (New York: Basic Books, 2000), 24, 27-28. 当文献の邦訳は、ステファニー・クーンツ『家族という神話——アメリカン・ファミリーの夢と現実——』岡村ひとみ訳 (筑摩書房、1998年) に従った。
- (64) 合衆国商務省編『植民地時代～1970年——アメリカ歴史統計 (1) ——』斎藤眞、鳥居泰彦監訳 (原書房、1986年)、64頁。
- (65) Coontz, *The Way We Never Were*, 33.
- (66) *In the Shadow of the Moon*. 付言すれば、アポロ8号のクルーたちの行動が政教分離の原則に反していたとの廉で、地球帰還後に彼らはテキサス在住のある女性から訴えを起こされたという。
- (67) *The Ten Commandments*, DVD, directed and produced by Cecil B. DeMille (CIC Victor Video, 2001).
- (68) *Ben-Hur*, DVD, directed and produced by William Wyler (Warner Home Video, 2001).
- (69) Sidney Earl Mead, *The Lively Experiment: The Shaping of Christianity in America* (New York: Harpercollins & Row, 1963).
- (70) Harbey Gallagher Cox, *The Secular City: Secularization and Urbanization in Theological Perspective* (New York: Macmillan, 1965).
- (71) James L. Baughman, *Henry R. Luce and the Rise of the American News Media* (Boston: Twayne Publishers, 1987), 10-11.
- (72) Henry R. Luce, “The American Century,” *Life*, February 17th, 1941, 63.

- (73) Michael Collins, *Carrying the Fire: An Astronaut's Journeys* (New York: Cooper Square Press, 2001), 24: "la crème de la crème."
- (74) Eugene Cernan and Don Davis, *The Last Man on the Moon: Astronaut Eugene Cernan and America's Race in Space* (New York: St. Martin's Griffin, 1999), 42. 当文献の邦訳は、ジーン・サーナン『月面に立った男——ある宇宙飛行士の回想——』浅沼昭子訳（飛鳥新社会、2000年）に従った。
- (75) "Head over Heels for What's Out There," *Life*, September 27th, 1963, 32.
- (76) David Scott and Alexei Leonov, *Two Sides of the Moon* (New York: St. Martin's Press, 2004), 63.
- (77) Gene Farmer, "The Best Scientific Mind in Space," *Life Special Edition: To the Moon and Back*, 45.
- (78) *In the Shadow of the Moon*.
- (79) Chaikin, *A Man on the Moon*, 107.
- (80) *Ibid.*, 123-124; Christopher Riley and Phil Dolling, *NASA Mission AS-506: Apollo 11: 1969 (including Saturn V, CM-107, SM-107, LM-5)* (Sparkford: Haynes Publishing, 2009), 61.
- (81) Grissom, "You Just Don't Have Time to Get Frightened," *Life*, September 14th, 1959, 28-29.
- (82) Slayton, "This Is Going to Be One Hell of a Thrill," *Ibid.*, 42.
- (83) 拙論「"Manifest Destiny" の20世紀的展開」、1-35頁。
- (84) Wainwright, "The Chosen Three for First Space Ride," *Life*, March 3rd, 1961, 26.
- (85) アームストロングがこの有名な言葉を発した際に、不定冠詞の [a] が抜け落ちていたことは、あまり知られていない。Courtney G. Brooks, James M. Grimwood and Loyd S. Swenson, Jr, *Chariots for Apollo: The NASA History of Manned Lunar Spacecraft to 1969* (Mineola, N.Y.: Dover Publications, 2009), 346: "That's one small step for [a] man, one giant leap for mankind."
- (86) Smith, *Moondust*, 328.
- (87) Chaikin, *A Man on the Moon*, 611-612.
チャールズ・イエーガーは宇宙飛行士ではないが、通例「チャック」・イエーガーと表記されるため、宇宙飛行士と同じ形式で表した。なお、チャック・イエーガーは、1947年10月17日に世界で初めて音速の壁を突破した伝説的なテスト・パイロットである。Tom Crouch, *Wings* (New York: W. W. Norton & Company, 2003), 458.
- (88) Chaikin, *A Man on the Moon*, 612.
- (89) マイケル・コリンズ『月に挑む——宇宙飛行士の記録——』海輪聡訳（藤森書店、1977年）、98頁。

参考文献一覧

<一次資料>

- Life*, February 17th, 1941.
Life, September 14th, 1959.
Life, September 21st, 1959.
Life, March 3rd, 1961.
Life, May 12th, 1961.
Life, May 19th, 1961.
Life, February 2nd, 1962.
Life, September 27th, 1963.
Life, June 18th, 1965.
Life, February 10th, 1967.
Life, July 4th, 1969.
Life Special Edition: To the Moon and Back, 1969.
New York Times, April 12th, 1961.
New York Times, April 13th, 1961.
New York Times, May 6th, 1961.
New York Times, January 28th, 1967.

<二次資料>

- Chaikin, Andrew. *A Man on the Moon: The Voyages of the Apollo Astronauts*. London: Penguin Books, 2007. [チェイキン, アンドリユー 『人類、月に立つ (上) (下)』, 亀井よし子 訳, NHK 出版, 1999年.]
- Smith, Andrew. *Moon dust: In Search of the Men Who Fell to Earth*. New York: Harper Perennial, 2006. [スミス, アンドリユー 『月の記憶——アポロ宇宙飛行士たちの「その後」 (上) (下) ——』, 鈴木彩織訳, ヴィレッジブックス, 2006年.]
- Wolfe, Tom. *The Right Stuff*. New York: A Bantam Book, 1980.

<その他の資料>

- Baughman, James L.. *Henry R. Luce and the Rise of the American News Media*. Boston: Twayne Publishers, 1987.
- Brooks, Courtney G., Grimwood, James M., and Swenson, Jr, Loyd S.. *Chariots for Apollo: The NASA History of Manned Lunar Spacecraft to 1969*. Mineola, N.Y.: Dover Publications, 2009.
- Cernan, Eugene. and Davis, Don. *The Last Man on the Moon: Astronaut Eugene Cernan and America's Race in Space*. New York: St. Martin's Griffin, 1999. [サーナン, ジーン 『月

- 面に立った男——ある宇宙飛行士の回想——』, 浅沼昭子訳, 飛鳥新社, 2000年.]
- Clarke, Arthur C.. *Childhood's End*. London: Gollancz, 2010.
- Collins, Michael. *Carrying the Fire: An Astronaut's Journeys*. New York: Cooper Square Press, 2001.
- Coontz, Stephanie. *The Way We Never Were: American Families And The Nostalgia Trap*. New York: Basic Books, 2000. [クーンツ, ステファニー『家族という神話——アメリカン・ファミリーの夢と現実——』, 岡村ひとみ訳, 筑摩書房, 1998年.]
- Cox, Harbey Gallagher. *The Secular City: Secularization and Urbanization in Theological Perspective*. New York: Macmillan, 1965.
- Crouch, Tom. *Wings*. New York: W. W. Norton & Company, 2003.
- Hansen, James R.. *First Man: The Life of Neil A. Armstrong*. New York: Simon & Schuster Paperbacks, 2006.
- Kranz, Gene. *Failure Is Not an Option: Mission Control from Mercury to Apollo 13 and beyond*. New York: Berkley Books, 2001.
- Mead, Sidney Earl. *Lively Experiment: The Shaping of Christianity in America*. New York: Harpercollins & Row, 1963.
- Murray, Charles. and Cox, Catherine Bly. *Apollo*. Burkittsville, Maryland: South Mountain Books, 2004.
- Riley, Christopher. and Dolling, Phil. *NASA Mission AS-506: Apollo 11: 1969 (including Saturn V, CM-107, SM-107, LM-5)*. Sparkford: Haynes Publishing, 2009.
- Scott, David. and Leonov, Alexei. *Two Sides of the Moon*. New York: St. Martin's Press, 2004.
- 青砥吉隆「“Manifest Destiny”の20世紀的展開——スプートニク危機とアポロ計画——」(国際基督教大学比較文化研究会編『ICU比較文化』, 第42号所収), 国際基督教大学比較文化研究会, 2010年.
- 合衆国商務省編『植民地時代～1970年——アメリカ歴史統計(1)——』, 斎藤眞, 鳥居泰彦監訳, 原書房, 1986年.
- コリンズ, マイケル『月に挑む——宇宙飛行士の記録——』, 海輪聡訳, 藤森書店, 1977年.
- 的川泰宣『月をめざした二人の科学者——アポロとスプートニクの軌跡——』, 中公新書, 2000年.

<映像資料>

- 2001: *A Space Odyssey*, DVD, directed and produced by Stanley Kubrick, MGM, 2007.
- Ben-Hur*, DVD, directed and produced by William Wyler, Warner Home Video, 2001.
- In the Shadow of the Moon*, DVD, directed and produced by David Sington, ThinkFilm, 2008.
- The Ten Commandments*, DVD, directed and produced by Cecil B. DeMille, CIC Victor Video, 2001.

The Heroic Image of the Space Age: American Ethos and Its Future in the 1960s

AOTO, Yoshitaka

This article aims to reveal the four characteristics of the heroic image of American astronauts in the Cold War era. In 1959, *Life* magazine started exclusive contract with the astronauts. On a tacit agreement, the magazine was forced to depict them as ideal American models. At the same time, the astronauts were also forced to act in that manner, because they represented the United States and raced in space against the USSR. That paradoxically means one can discover the essence of the ideal American models in the Cold War period, by closely examining the articles about the astronauts in *Life* magazines.

The author explored all the issues of *Life* magazines which featured the astronauts and the American space programs, and analyzed seven to demonstrate how the astronauts were defined in *Life* magazines.

Conclusion is as follows; the astronauts were the national heroes who embodied the ideal American models in four different ways. Firstly, they were brave and patriotic; they had the *right stuff*. Secondly, the astronauts loved their families. Thirdly, they were good Christians. The three above reflected American ethos from the late 1950s to the 1960s, and were the requirements to establish the astronauts as national heroes. Finally, they were those who scientifically shaped the hopeful future of the United States. Indeed, they were required to have highly advanced scientific and engineering knowledge to carry out the Apollo Program. And moreover, space in the 1960s was the place where the future would develop. By exploring space, the astronauts demonstrated the progressive view of history which the Americans of the 1960s held.